

## お竹大日如来と江戸の庶民信仰

—『懐溜諸屑』を手がかりに—  
(要旨)

高山慶子\*

お竹大日如来とは、元和・寛永期(1615~44)に江戸大伝馬町の佐久間家で働いていた竹という下女が、死後に大日如来として出羽の羽黒山黄金堂に祀られたものである。江戸ではお竹大日如来の出開帳が行われたが、嘉永2年(1849)の出開帳では錦絵など多くの摺物が板行された。

幕末の江戸の落語家が収集した摺物を貼り合わせた貼交帳『懐溜諸屑』には、嘉永2年に作成された単色墨摺の「於竹大日如来縁起」がある。本報告は、この一枚摺を手がかりに、江戸の庶民信仰や信仰周辺の出版物をめぐる諸相について、実態の解明を試みたものである。

嘉永2年の出開帳が行われた頃には、著名な絵師たちによる、お竹大日如来の錦絵が板行された。多色摺の錦絵は、大名から庶民まで幅広い階層の人びとに受容されたが(大久保純一『浮世絵出版論』吉川弘文館、2013年)、『懐溜諸屑』の「於竹大日如来縁起」は簡易な墨摺である。錦絵よりも安価であろう墨一色の一枚摺は、より広く庶民層にいざわたつたと推測され、お竹大日如来はこのような摺物を通して広く知られるようになったと考えられる。

なお「於竹大日如来縁起」の絵の作者は不明であるが、この絵は国芳画の錦絵とよく似ている。国芳の錦絵は複数あるが、当該図は狂句「下女如来 障子へうつる 法のかげ」の内容を絵にしたものである。「於竹大日如来縁起」と国芳画の錦絵の、どちらが先に作成されたのかは不明である

が、両者に関連性があったことを指摘できる。

『懐溜諸屑』には、お竹大日如来が「於為大なし如来」(おためだいなしわるい)として登場する一枚摺があるが、ほかにも神仏を滑稽化した「とんだ霊宝」などの一枚摺が貼り込まれている。また、この貼交帳には「おかひてう落しばなし」(御開帳落し咄)と題された一枚摺もあるが、これは、安政4年(1857)に江戸で上総芝山仁王尊の出開帳が行われた際に作成されたものとみられる。落語家らしい収集摺物の一つといえるが、こうした神仏の出開帳に関係する摺物には、笑いや娯楽の要素を含むものが少なくない。

また『懐溜諸屑』には、「御詠文作認所 代作屋代作」が、文面の代作を請け負うことを記した引札がある。そこで代作の対象となっているものの一つに「神仏開帳縁起類」があり、「神道・両部・浮屠・方便・霊宝のゆらい等にいたるまで、国史・神書・経文のうちより考証仕候」とある。「於竹大日如来縁起」は、お竹大日如来の由来を記した文章と絵で構成されており、この構成は錦絵でも同様であるが、こうした摺物の文章部分の代作を請け負う人(業者)が存在したのである。「於竹大日如来縁起」の文章が代作人(業者)によるものかどうかは不詳であるが、種々の錦絵や「於竹大日如来縁起」に記された文章には、竹の生国(奥州、上総国、神奈川、記載なし)などに違いがあり、複数の書き手の存在が想定される。神仏の出開帳の折に、錦絵や、錦絵よりも簡易・安価な摺物が、多く出回った背景には、代作人(業者)の存在があったと考えられる。

\*宇都宮大学准教授